

## 混迷のトルコ

会員 大野康昭

始めに、

今回、家内が新聞を見て「きらめきトルコ旅行」と銘打ったツアーに行きたいと言い出した。いままでは、年齢を考えて長時間のフライトを要する地域には無理だと言っていたがトルコ国内の移動には主に飛行機を利用、イスタンブールとカッパドキアには連泊、費用の安さ等を考えて、行きたくなったらしい。私もトルコには行ったことがないし、行って見たいと思っていたので、即同意しました。

ところが、カッパドキアの気球事故、旅行代金支払い後、トルコ国内の反政府デモの勃発と、思わぬ問題が起こってきた。どうしたものかと戸惑いましたが、私も今年の2月で古希を迎えた。残された年月も、いつ突然終止符を打ってもおかしくない年齢になった。

「GO」の決断を下しました。今回のトルコツアー旅行は6月4日から6月12日の8日間の日程でした。旅行社からの連絡では、「デモは観光に影響を及ぼすほど重大な影響はありません。既に10日前にトルコに出発したツアーも予定通り進んでいます。」とのことでした。気球によるカッパドキアでの飛行は、オプションで入っていましたが、エジプト、トルコと、連続して事故が起きているので、今回の旅行では中止しますとの連絡が出発直前に書面で送られてきた。しかし、出発前日の添乗員さんの話では、どうしても気球に乗りたければ、(旅行会社は責任を負わないが)カッパドキアの気球運営会社に直接、乗船料を払えば乗る事が出来るとのことでした。今回のトルコ旅行の大まかな行程は、トルコ航空直行便でイスタンブールに入ります。翌日、イスタンブール市内観光、3日目、飛行機でイズミールまで、古代都市エフェソスを見学後パムッカレまでバスで移動、パムッカレで一泊、石灰棚散策、バスでパムッカレからコンヤまで(約430キロ、所要時間6時間)、コンヤでメブラーナ博物館見学、その後再度バスでカッパドキアまで移動(約220キロ)、カッパドキアで洞窟レストランで二泊、6日目カッパドキアから空路で再びイスタンブール、グランバザール見学の後、ボスボラス海峡クルージング、7日目、イスタンブール市内観光、アタチュルク空港から成田に、8日目朝、成田着。

今回の旅行は初めから思わぬハプニングに遭遇しましたので、長距離のバス移動の中で聞いた、現地ガイドのオカンさん(日本の埼玉県深谷市に住んでいたことがある方で日本語が堪能)から聞いたトルコ文化、歴史を含めたトルコ事情を基に、少し切り口を変えて書いてみたいと思います。

### 近代トルコの基礎

オスマントルコ帝国の後、現代のトルコも含む近代トルコを創ったのは取るこの英雄であ

## 【海外旅行滞在記】

るケマル・アタチュルクである。イスタンブールにある国際空港の名前はアタチュルク国際空港である。イスタンブールの公園に立っている銅像もトルコ共和国初代大統領、アタチュルク大統領である。トルコ語のアラビア語の表記をアルファベットに変えた。政教分離を確立した。トルコの首都をイスタンブールからアンカラに移した。もともとはオスマン帝国軍の将軍であり、数々の戦跡を残し、トルコのヒーローとなり、第一次大戦の後オスマントルコの王族ファミリーを国外に追放した。女性の参政権を確立、ギリシャのイスラム教徒とトルコのキリスト教徒を交換条約によりお互いの国に移動させた。アジアで初めて近代化を成し遂げた日本への関心が高く、トルコ共和国の近代化に、民族資本の導入、国立銀行の設置、法制面の整備等、日本の明治維新を手本にしたと聞く。

### イスタンブールオリンピック

2020年の夏季オリンピック候補地にイスタンブールと東京が立候補して争っているのも不思議なめぐり合わせである。猪瀬都知事のイスラム差別発言により国際的にも大きな非難を浴び、その後トルコへの謝罪などがあったが、一時は、東京開催は無理ではないか、とさえ言われた。ところが、その後の反政府デモなどでトルコでの開催も危惧された。幸い、その後のI O Cの中間報告では、これらの事は問題視されていない。マドリッドも含めてまだ、どこが有利かは、白紙の状態ではないのか。

イスタンブール市内をバスで観光して驚いたのは、交通渋滞の凄さである。特に通勤時間帯でアジア側～ヨーロッパ側間の道路は、特にひどい。見たところ、地下鉄や通勤電車は、余り見かけない。これでは、なかなかオリンピック開催は大変なのではないかと思っていたら、今年の10月にはアジア側～ヨーロッパ側地域の海底トンネルが完成予定だそうだ。工事は、大成建設が請け負っているそうである。戦後の日本の発展も東京オリンピックが契機となっている。イスラムの優等生と言われるトルコも、オリンピック開催は長年の夢であろうし、イスラム圏での最初のオリンピック開催の動機付けは、東京が掲げる3・11震災後の日本の復興よりも強力に見える。9月I O Cの最終決定が待たれるところである。



ボスポラス海峡クルージングで見たヨーロッパ側対岸の眺め

### 反政府デモ

そもそも今回のデモは、タクシム広場前のゲジ公園の再開発を政府が発表したのが発端である。タクシム広場は、もともと憲法で定められている「政教分離」の聖地であるのに、そこに、緑豊かな公園を壊してショッピングモールを建設すると政府が発表したのである。これに反対するデモ隊が公園に集まりだし、日に日に数を増加して行ったのである。デモ隊の多くは、「International Herald Tribune」、によれば多くは自由意志論者と言われる18歳～30歳の若者であるという。経済の好調に自信を得てエルドアン政権が強権的な政治を進めてきたのも、大きなデモの理由のようである。今回のデモは、トルコ経済に大きな影響を与えており、株式の下落、トルコリラの下落、観光への打撃等で、一般の人々は暴動の後の静けさを求めているようだ。しかしなかなか、収束はみられず、警察とデモ隊の対峙は長期化を見せている。にも拘わらず、政府の支持者は、反対意見の噴出はむしろ民主主義の健全な証しであると歓迎していると言う。この辺は、エジプトの政変やブラジルの暴動とは、一線を画しているように見える。

今回の旅行では、最終日がイスタンブールでの自由行動となっており、私達夫婦もタクシン広場近くのドルマパブチェ宮殿（スルタンの城として有名）を見学しようと思っていたが、旅行社から危険だから行かないでくれとの依頼があった。その代わりに、参加者全員でバスでエジプシャンバザールを見学する事になった。我々の泊まっているホテルは、タクシン広場近くの高台の米国系のホテルで、最終日の朝は、13階の部屋だったが窓の下には広場に通ずる道には車が通れないようにバリケードが張られ、機動隊員の隊列が坂を上っていくのが見えた。CNNのテレビ放送は、其の模様を実況中継していた。



アヤソフィア寺院



エジプシャンバザール

### 気球に乗ってみて

エジプトでの気球事故は日本人の死亡者がでたからか、其の記事は大きく扱われたが、カッパドキアの気球事故も一人の死亡者、数十人の怪我人がでたにもかかわらず、日本ではあまり大きくは扱われなかった。

カッパドキアの熱気球は、以前会社OBの友人からトルコに行くなら是非、気球に乗ることを勧められていたので、旅行社に申し込み、旅行社からは全て自己責任で気球乗船に参加する旨の誓約書と、ツアー旅行からの一時離脱をする同意書を提出させられた。我々のグループからは、2組みの参加者があった。バルーン会社に支払った料金は、一人230ドルであった。

気球の方向は風任せであるので、風の安定している早朝が選ばれる。朝5時にホテルのロビーから小型バスに乗って、バルーンの出発拠点に行く。そこで受付を済ませ、コーヒーやケーキが準備されている。やがてホテルの名前が呼ばれ、同じホテルに泊まっている人達と熱風を吹き込まれているバルーンの前で待機する。気球は離陸よりも、着陸の方が危険とのことだ。着陸の際の、姿勢やその他の注意事項が英語で説明される。一つの気球の籠には、約20人が定員である。かなり大きなものだ。やがてバルーンは熱風で膨れ上がり、乗船者が乗り込む。パイロット一人と補助員が二人予め乗っている。気球の高度は200メートルから300メートル位まで上がる。朝焼けのカッパドキアの上空は美しい。奇岩を空から俯瞰する。既に100機近いバルーンが空中に浮かんでいる。高度を下げたり、上げたりで、約1持間の空中散歩である。降りるときは、予め無線で方向を確認してバルーンが着地する場所近くに小型トラックを待たせてある。トラックの荷台に籠を収めるように着地できれば成功だ。それがかなわない場合は、近くの草原に降りることになる。トラックの荷台の場合は、地上の要員がすぐにロープでバルーンを固定して、乗客を降ろさせる。草原の場合は、籠がなかなか安定せず、全員の下船までにはかなりの時間を要する事になる。しかし、気球は気候さえ安定していれば、かなり安全な乗り物であるといえる。

着陸後はパイロットさんたちと無事を祝って、シャンペンで乾杯だ。パイロットになるには、ライセンス取得までにはかなり訓練の長期期間を必要とされるとのことだ。朝の7時半までには、無事ホテルに到着した。



空から見たカッパドキア



別の気球の観光客

### トルコの魅力

007の「ロシアより愛をこめて」の舞台はイスタンブールの地下宮殿が舞台となっている。この地下宮殿は5世紀ごろの東ローマ帝国の地下貯水池であったそう。なんと言っても、地理的要因、東西文化の十字路と言われるアジア側とヨーロッパ側の二つの地域を有するかつてのビザンチン帝国時代の首都、イスタンブール、人口も1200万人でほぼ東京に匹敵する。其の中に点在するイスラムの寺院、オスマントルコ時代のトプカプ宮殿、人種の坩堝のようなグランバザール、オリエント急行の出発駅もある。アガサクリスティの「オリエント急行殺人事件」は1934年の作だ。ベートーベンもモーツァルトもトルコ軍楽隊の音楽に見せられ、トルコ行進曲を創っている。オスマントルコの二度のウィーン包囲による影響で18世紀の西洋ではトルコ趣味で沸きかえっていたという。またアジア側に位置する広大な大地もトルコを形成する魅力の一つだ。そのなかに、古代都市エフェソス、石灰棚のパムッカレ、奇岩カッパドキア等の自然の魅力が存在する。まあ、しかしなんと言っても我々日本人には、其の親日度が高いのも大きな魅力の一つであろう。



エフェソスの遺跡